

国

語

(  
解答  
番号

1

5

40

)

**第1問** 次の文章を読んで、後の問い(問1～6)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。また、表記を一部改めている。(配点 45)

- ミツバチたちは、唸<sup>うな</sup>りをあげる。スペインのキョ<sup>(ア)</sup>シヨウウ・エリセの映画『ミツバチのささやき』(一九七三年)が、かつて教えてくれたように、あれは実は何かのささやきだったのだ。実際、あの映画の主人公は、ミツバチのささやきに誘われるように、生と死の境界線を彷徨<sup>ほうこう</sup>する少女だったが、彼女は最後に森で、人造人間の幻に出会っていた。スペイン内戦の終結直後を描いたあの映画では、ミツバチたちの社会(勤労・調和・秩序)への共感と別の人間(ファシスト、<sup>(注3)</sup>脱走兵、<sup>(注4)</sup>フランケンシュタイン)への絶望が交錯していた。ミツバチと人造人間の出会いはいまや、リアルに可能なものとなっている。いまでは誰もが知ることでだが、ミツバチは巣箱に蜜を持ち帰るだけでなく、花畑の在<sup>あり</sup>処<sup>か</sup>を知らせる貴重な情報とデータを、ダンスなどで仲間たちに伝える記号的能力を持つ。恐らくはこうして群れにもたらされる情報とデータこそが、ミツバチの本当の「労働」の成果であり、**A** 真の存在価値だろう。群れは、個別の働き蜂たちが集めてくる位置情報などのデータのおかげで、効率的に蜜を巢<sup>ね</sup>ため込むことが出来るからだ。これは情報化された分業の形式と呼ぶべきであろう。もしも一九世紀に、動物の記号論的行動がもつと知られていたなら、経済学の姿はずいぶんとかわっていたかもしれない。それはともかく、一生懸命に生きていくただそれだけで、群れ社会全体に有益な情報とデータをもたらすミツバチなり、アリたちの生存は、明らかに、最先端のテクノロジーによって生活を営むわれわれの姿とぴったりと重なるといえよう。花の蜜が労働の直接の生産物だとすれば、花畑の在処<sup>あり</sup>という社会的集团的に共有され活用される間接的な(あるいはこちらこそ直接的な)情報こそ、われわれが現在、あらゆる瞬間に、生きていくだけで提供し、「生産」し続けているものだ。われわれは、それほどまでに、生のテクノロジーの内部に捕捉<sup>せい</sup>され、生<sup>(注5)</sup>権<sup>(注6)</sup>力<sup>(注7)</sup>下<sup>(注8)</sup>における新しい価値システムに内在している。では、人造人間フランケンシュタインの方は、どうだろうか。
- 新しいフランケンシュタインを、「データ・リヴァイアサン」と呼ぼう。そもそもリヴァイアサンは、無数の人間たちを合成して作り上げられた、「死すべき神」であり、トマス・ホップズが、近代の開始にあたって、国家のメタファーとして作り上げた人

造人間である。この隠喩は、重大で、かつ奥深い。それは現代のビッグデータの時代にも、見事に当てはまると考えられる。米欧日そしてこの種の話題に欠かせない中国を加えてのビッグデータを巡る熾烈な争奪戦は、地上の怪物的巨大国家群（リヴァイアサンの群れ）による戦いを、何より思わせる。電子マネー決済から生体認証をはじめとして、登録された個人情報（イ）クシし、街角の監視カメラによる追跡と解析を通じ、無線接続からのスマートフォンやスマートフォンのスキャンなどによって、われわれは一人残らず丸裸にされている。あらゆる技術が動員される現在では、われわれが指やカードで何かに触れたり、歩いて移動したり、いや、たとえ家にいてほとんど動かなくても、すべての情報は、何らかのセンサーによって送信され、解析され、蓄積され続けている。ただ生きているというそれだけで、われわれは膨大なデータを「生産」し続けていると考えなければならぬ。日々の報道を見るだけで、いまやわれわれの「個人」データが、本人の知らぬ間に蓄積され、解析され放題になっているという状況は、想像を超えて深化していることがわかる。この状況それ自体が、生産や消費の概念を根源的に変える可能性を持つ。これは、極めて重大な時代の特性である。ミツバチたちのささやきが、われわれの姿を、まるで鏡に映すように示してくれるのだ。

ミツバチの寓話（うたと）をもう一度まとめておこう。個別のミツバチがせつせと持ち帰る蜜の量はたかがしれているが、発見された花畑に群れをなしてエン（ウ）セイ（ウ）できることで、遙かに収穫量を引き上げることができる。ミツバチといわれわれ人間といひ、

（注7）

30 それぞれの個体や個人は、その属する群れや社会体（しゃかいたい）に直接に接続された、データ収集装置であり、群れ（社会）全体にとつて獲物発見のための触覚ないしセンサーにほかならない。人間についてさらにいうなら、われわれ一人一人の労働は、なるほど価値を創造する行為だが、しかし、その作り出すものは、全体から見ればたかがしれている。もちろん、この小さな価値から出発して信用が生まれ、資金が投入され、大きな利益が生じるのだから、その礎石であり、基底であることは間違いない。しかしそれでも、情報技術の巨大な進展によつて、価値創造の中心は移動しつつある。個人が働いている時も病気の時も、生きている限りは社会の触覚として情報を提供していく方が、同じ人が会社や工場などで（エ）キョウギの生産に携わっている時よりも、大きな価値を生み出しているのかもしれない。いや逆に、そうだからこそ、われわれは社会のアンテナやレーダーのようなものとして、社会にわれわれのデータを提供し続ける、そのように仕向けられ、そのように装置の内部に組み込まれているのである。B 最

先端のテクノロジを身に着けたわれわれ現代人は、ミツバチやアリと本質的に同じものと化しつつある。

40 これがわれわれの生きている時代の実相だとしたら、いったいどうしてこんなことになってしまったのかと、問いたくなるだろう。誰も蜂やアリに似たいと思つて人生を過ごしているのではない。しかし、社会にとつての個人の役割は、まさにミツバチのそれと五十歩百歩になりつつあるのだ。これが時代の第一の特徴であり、労働はそのまま続いているが、それと同時に、人々は別の労働(データ収集のセンサー部品となること)に従事しているのだ。これが、「データ・リヴァイヤサン」の第一の意味、認識論的機械としてのその意味である。

45 そもそもホップズ「リヴァイヤサン」からして、存在論的なメタファーであることを踏まえれば、当然ながら、新しいマシンとしての「データ・リヴァイヤサン」という表象も可能だろうと思われる。それは、存在論という以上、それがそのものであること、自分が自分自身であることの、根源的な問題に関わるのである。

50 もちろん、自分自身であることは基礎的なことで、たいていその部分は自明な自動過程で「処理」される。その支えのお陰で、われわれは「ノーマル」に生きていけるのだ。そしてこの「ノーマル」感には、自分であることの自明で自動的な過程が、だいたい「私の身体」の内側に、この皮膚の内側に内蔵されているという、暗黙の了解がある。しかし、この了解は漠然としたもので、実はあやふやである。近代というわれわれの時代の開始時期に、ルネ・デカルト、ホップズ、バルーフ・スピノザという偉大な思想家たちは、このあやふやさにしつかりとした構造を与えたのであるが、それはまた同時に、われわれの深部に癒<sup>い</sup>しがたい傷跡を残した。この傷から、われわれの生きてきた時代と、これから生きる「世界」の基本的な見取り図を取り出してみたい。われわれをわれわれたらしめているこの傷こそ、ここで「存在論的機械」と呼ぶものである。まずは <sup>C</sup> それがどのようなものなのか、  
分身のメタファーを用いて提示してみよう。

55 (注8) 稠密な連続体には、機械の入り込む余地がない。だから、液状(リキッド)化した場所などに機械は存立しない。機械は、液体内ではなく地層内に生じる。周知のように、われわれの生きている時代においては、精神は断片化し、そこに機械が象嵌<sup>さかん</sup>されている。われわれと機械は、見分けのつかない分身となりつつある。だがもちろん、分身は不吉なもの、「不気味な

- 「uncanny」ものと相場が決まっている。一九七〇年代といえ、大阪万博などことあるごとに、ロボット工学が目され、未  
来の技術として華々しく登場した時代であることは常識であろう。だが、その当初からの指導者だった森政弘は、「不気味の谷」  
現象を夙に指摘していた。この現象は、ロボット工学の範囲に留まらず、SF文学などにも広く知られることになったから、ど  
こかで耳にされた人も多いだろう。要点は、あまりにも人間に似た動きをする文楽の人形が薄気味悪いのと同様に、あまりにも  
人間にそっくりなロボットは、不気味な「他者」と見えるということだ。人間への類似（外観や身振り・挙動）のみならず、言語や  
思考でも人間と同等もしくはそれ以上のパフォーマンスをするという具合に、人間を凌駕しかねないほどの高性能のロボッ  
トを製作してしまうと、ある閾値を超えた瞬間から、そのロボットを見る人間は、ゾンビと遭遇したような不気味さと不安に襲  
われるのだという。これが「谷」と命名されたのは、この不安感を曲線で表現すると、まるで谷に転げ落ちるような曲線を描くか  
らなのだ。このように人間そっくりのロボットにつきまとう違和感は、最先端のロボット工学では（アート、映画関係を含む周  
辺分野を含めて）、以前から共通の問題として意識されていたのである。分身もたらず不安と不気味さということだろう。も  
ちろん、分身と不気味さについては、ジークムント・フロイトの古典的な論者が、ここでは常に参照されるべきだろう。余りに  
も自分に似た他人の姿を見ると、人は必ず不安になるからだ。だからこそ、分身と自分の死を結びつけるのは、昔から文学や映  
画の得意とする物語だというのは、周知のことだろう。芥川龍之介然り、ジェラルド・ド・ネルヴァル然り、そしてE・A・  
ポーの短編「ウィリアム・ウィルソン」然り。とりわけポーの名高い物語では、分身に出会った主人公は、執拗につきまとう分身  
に怒りを爆発させ、ついにローマで分身を刺殺してしまう。不安の原因を受動的に我慢するのではなく、能動的にそれを支配し  
ようと逆転を試みたのだ。しかし、それはすなわち自分自身に死をもたらず。支配するものを支配しようと試みて、自分自身に  
暴力を振るい、(オ)ハメツを招く。分身は、オリジナルの本人の運命と本源的に縫い合わされているが故に、つまりオリジナル  
と区別できないからこそ、逆説的にも分身なのである。

(佐藤淳二「データ・リヴァイアサンの降臨」による)

(注)

- 1 『ミツバチのささやき』——スペインの映画監督ビクトル・エリセ(一九四〇―)の作品。
- 2 スペイン内戦——一九三六年から一九三九年にスペインで発生した内戦のこと。フランシスコ・フランコ(一八九二―一九七五)による独裁政権が樹立された。
- 3 ファシスト——ここでは、他の考えを認めない独裁的な権力体制を信奉する人々のこと。
- 4 フランケンシュタイン——ここでは、映画『フランケンシュタイン』(一九三二)に登場する、死体をつなぎ合わせて作られた人造人間のこと。
- 5 生権力——個人の身体や生命を管理する権力のこと。フランスの哲学者ミシェル・フーコー(一九二六―一九八四)の用語。
- 6 リヴァイアサン——水中にすむ巨大な怪獣のこと。トマス・ホップズ(一五八八―一六七九)は自著『リヴァイアサン』(一六五二)で、国家をリヴァイアサンにたとえている。
- 7 社会体——社会を構成する組織のこと。
- 8 稠密——隙間なく集まっていること。
- 9 象嵌——ひとつの素材に異質の素材をはめ込む工芸技法のこと。
- 10 閾値——限界値のこと。
- 11 「ウィリアム・ウィルソン」——一八三九年刊行。アメリカの文学者エドガー・アラン・ポー(一八〇九―一八四九)の作品。

問1

傍線部(ア)～(オ)に相当する漢字を含むものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

1  
5

(ア)

キヨシヨウ

- ① 企業に対しシヨウを起こす
- ② 凶悪犯罪のオンシヨウを一掃する
- ③ 斬新なイシヨウが凝らされた建築物
- ④ 同じクラスの友達をアイシヨウで呼ぶ

(イ)

クシ

- ① お寺のクヨウ塔をお参りする
- ② サイクが施された民芸品
- ③ 秘技をクデンする
- ④ AI研究のセンク者

(ウ)

エンセイ

- ① 厳しい冬山をセイフクする
- ② 新たな法律をセイテイする
- ③ 夏休みに実家にキセイする
- ④ 緊急の支援をヨウセイする

(エ)

キヨウギ

- ① 速さをキソウ
- ② 隙間にハサまる
- ③ セマイ通路を通り抜ける
- ④ ウヤウヤしく頭を下げる

(オ)

ハメツ

- ① 新しいボウハテイを築く
- ② 歴史小説をドクハする
- ③ ハシュツジヨで道を尋ねる
- ④ 大会のハケンをかけて争う

問2 傍線部A「真の存在価値だろう」とあるが、筆者がそのように述べる理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 6。

- ① 分業の形式によって得られた位置情報などがいかに集団の存続にとって必要かを強調することによって、個別の主体が果たすべき役割についての議論へとつなげるため。
- ② 個体の行動のなかから抽出された情報こそが全体に富をもたらすことを強調することによって、経済学の分野におけるデータの活用についての議論へとつなげるため。
- ③ 労働によって直接的に生産されたものよりも間接的に得られた情報の有用性を強調することによって、共同体における情報の有効利用についての議論へとつなげるため。
- ④ 全体にとっての価値は個別に集めたものではなく共用された情報の方にあると強調することによって、データに取り囲まれた社会についての議論へとつなげるため。

問3 傍線部B「最先端のテクノロジーを身に着けたわれわれ現代人は、ミツバチやアリと本質的に同じものと化しつつある。」

とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

7。

① 最先端のテクノロジーによって個人のデータを提供し続けることが社会への貢献となっており現代人のあり方が、群れ社会全体が発展していくために単に花の蜜を持ち帰り生産物を効率的に集積していくミツバチやアリの姿と本質的に重なり合うということ。

② 最先端のテクノロジーによって高度に分業化され緻密になった労働に従事させられている現代人のあり方が、群れ社会全体にとって有益である「花畑の在処」という情報やデータを個々に収集していくミツバチやアリの労働と本質的に重なり合うということ。

③ 最先端のテクノロジーによって毎日の生活のなかで無自覚のまま情報を提供させられている現代人のあり方が、群れ社会全体にとって有益な情報やデータを労働の成果物とは別に提供し続けるミツバチやアリの生き方と本質的に重なり合うということ。

④ 最先端のテクノロジーによって社会における労働と生産に対する認識をこれまでとは大きく変質させた現代人のあり方が、群れ社会においてデータの収集と共有を行い新たな価値を創造しているミツバチやアリの労働の形態と本質的に重なり合うということ。

問 4

傍線部C「それがどのようなものなのか、分身のメタファーを用いて提示してみよう」とあるが、筆者は「分身のメタファー」を用いてどのようなことを提示しているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 8。

- ① 人間の存在と切り分けられない機械の登場という現状に関して、人間の自明で自動的な自己の存在への了解の仕方現在の機械が変更をもたらす際の亀裂や動揺のありようを、自身に似すぎているがゆえに分身に否定的な感情を向ける物語を例に提示している。
- ② 人間と見分けがつかず酷似した能力を備えた機械の出現という現状に関して、「不気味の谷」現象が表すような自己の存在に似たものに対する違和感や執着のありようを、自分と等価であろうとする分身に対して暴力を振るってしまう創作物を例に提示している。
- ③ 発達を続ける機械が人間の力をはるかに凌駕してしまっている現状に関して、同じ姿をしながら人間よりも優れた力を持つ機械に対する焦りや怒りのありようを、自己の存在を超える言語や思考などの能力を持つ分身に劣等感を覚える文学を例に提示している。
- ④ 機械と人間の境目がわからないほど両者が融合している現状に関して、あまりにも自己の存在と同一化している機械へ抱く警戒心や危機感のありようを、分身のたどる運命がオリジナルの本人の運命とも密接につながっているフィクションを例に提示している。

問5 この文章の表現に関する説明として**適当でないもの**を、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 

9
---

。

- ① 「ミツバチたちは、唸りをあげる」(1行目)や「ミツバチたちのささやき」(27行目)のように、昆虫などの例示を用いることによって、現代の人間のあり方を比喩的に表現しようとしている。
- ② 「フランケンシュタイン」(15行目)や「リヴァイアサン」(16行目)という想像上の怪物を提示しつつ、現代社会の不安な状況について読者と感覚的に共有しようとしている。
- ③ 近代のはじめに登場した「偉大な思想家たち」(50～51行目)が論じたことを参照しながら、国家・社会と個人との関係について、近代から現代につながる問題であることを連続的に展開しようとしている。
- ④ 人間が近代より前から抱えてきた、災厄をもたらす「見分けのつかない分身」(57行目)の不気味さについて、工学的なデータや近代の文学・映画などを用いて論理的に証明しようとしている。

問 6 次の【資料】は、本文の続きで、筆者が「人工知能」について論じている一節である。これを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。なお、設問の都合で表記を一部改めている。

【資料】

データベースは、むしろデータを集めたいという科学の生産欲望の表れたが、逆説的なことに、それは記録するだけで、「記憶」を持たないのだ。しかし、現在の人工知能は、単なる蓄積だけではなく、データ相互を自ら関係させ、深層で学習する。もう誰もが知っているように、囲碁・将棋という最高度の知性と直観を要求されるゲームで、もはや人間はまったくAIに勝つことができなくなったのも、この学習機能の進化による。一言でいえば、人工知能がもはや昔日の「道具」ではないこと、われわれを凌駕しえる一個の「他者」であり、「主体」であること、「分身」であることを、認める必要がある。データ・リヴァイアサンは、ビッグデータによるデータベースではなく、データがデータを超越しつつ新しい展望を生成する、一つの主体であり分身だ。さらにいえば、それが道具でない以上、データ・リヴァイアサンは、環境に単に属しているのではなく、まさにわれわれと同じ「世界」を形成しうる存在なのである。

(i) この【資料】では「人工知能」をどのようなものとして考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 10。

- ① 人工知能は人間によって作り出されたものだが、いまや自ら学ぶものとして成長している。それはもはや人間に使われるだけの道具ではなく、人間と同じく自らを取り巻く環境を作り変える存在になっているということ。
- ② 人工知能は人間の科学的な願望にしたがってデータを収集し発展し続けている。過去の人工知能とはまったく異なったその能力はすでに人間を上回り、将来的に人間を支配しかねない超越した存在になっているということ。
- ③ 人工知能は本来求められていた記録にとどまらず、記憶の領域を持つものとして進化している。その進化はビッグデータを構築するなど現代社会にとって不可欠なものであり、人間を補完する存在になっているということ。
- ④ 人工知能は情報の集積という機械的な特徴だけでなく、情報を結びつける力をも身につけている。この先の世界について見通すその能力によって、人間とともにひとつの世界を作りあげていく存在になっているということ。

(ii) 本文および【資料】を読んで、全体の趣旨として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

11。

- ① 筆者は現代における急激なテクノロジーの進展がかえってわれわれを疎外している弊害を指摘するとともに、人間が人間として生きながら機械を活用していくという現代テクノロジーとの共存のヒントを提出しようとしている。
- ② 筆者は情報技術の驚異的な発達によってわれわれの行動がすべて監視されてしまっている現状を指摘するとともに、こうした世界のなかでどう振る舞えば情報の網の目から逃れうるのかという方法を提起しようとしている。
- ③ 筆者はわれわれの日々の営為から情報を収集している現在の科学技術の一面を指摘するとともに、もはや単純な道具ではなくなっている機械に対して人間がこれまで有していた認識を改めていく必要性を提示しようとしている。
- ④ 筆者は現在進行しているビッグデータをめぐる人間存在の断片化とそのデータの社会における重要性を指摘するとともに、われわれの未来においてこのデータをどのように利用していくかということを提案しようとしている。

## 第2問

次の文章は、宇野千代「巷の雑音」(一九二二年発表)の一節である。お絹はおえい一家の二階に間借りし、分割払いで購入したミシンで、縫製の請負仕事をしていた。しかし、けがをして寝込んでしまったことよって月々の支払いが滞り、ミシンは回収されてしまう。本文は、そんなお絹のもとに手紙が届くところから始まる。これを読んで、後の問い(問1〜7)に答えよ。なお、設問の都合で本文の上に行数を付してある。(配点 45)

その郵便は弟の英二から来たのであった。一年に三度ぐらいいしか手紙を書いた事のない英二は、それで、綴方(注1)とお習字の仕上げを根限り遣(注2)っていた。

お絹は先ず、封筒の馬鹿丁寧な字を見て、微笑した。その手紙には何時も、お世辞がちつともないのであった。電報をもう少し、長くしたようなものであった。「くさりの単語から色々な意味を汲みとらなければならなかった。一字一句を様々に延長して考えなければならなかった。A この仕事はお絹に、人知れぬ喜びを齎(もち)してくれた。が、今朝の手紙には、「裏の藪(やぶ)に筒(たけ)がたくさん生えた。」とも「お父さんは大変丈夫だ、」とも書いてはなかった。ほんの一行読んだきりで、お絹は顔の色を変えた。その手紙には、田舎者らしい信頼と、無骨な卒直さで、

「私は明日の夜行で立つから、停車場まで迎えに来てくれ。」  
と書いてあった。——誰がお前に来いなどと——それはお絹が書いて遣ったのであった。

10 お絹はたった二週間前の事を忘れていた。寝ている間中、彼女は自分の事だけしか考えていなかった。もしくは、自分の道に立塞(たちさ)がろうとする厚かましい人間に対して、反抗する事ばかりしか考えていなかった。然し、英二はもう、汽車に乗って、林檎(りんご)の白い花を窓に見ながら東京に向(むか)っているであろう。

お絹はミシン屋の甘言にうまうまと引掛(ひっかけ)って、安っぽい感激で有頂天になっていた自分を呪った。そんな夢はとうの昔に、消えてなくなっていた。

15 「又この上に、丸裸のまままで食いたがってばかりいる人間が、一人増えるのか！」

お絹は溜息を吐いた。

が、汽車は脱線もしないで進行していた。

お絹は顔を洗いに下りた序に、おえいに話し掛けた。

「国から弟が来るって言って来たんだけど、全く困ってしまうのよ。」

20

「今は駄目だと言って遣ればいいじゃあないか。」

たった一人の相談相手は、そんな事は考えるまでもない、という顔付で、**(ア)**にべもなく言って退けた。

**B** お絹は情けない顔

をして、夕方は上野へ着くはずだ、と言った。

「無鉄砲な事を遣るもんだねえ。」

おえいはこう、仰山な言方をして、馬鹿正直な田舎者と、虫の好い姉娘とを一緒に非難した。

25

「一体、如何するってんだらう?」

と、おえいは、相手に聴えないような低い声で呟いた。そして、早速、**(注4)** ナツプルの時計会社へでも、世話をして遣らなければなるまい、と、ひそかな親切心で思い廻らしていた。

午後、汽車が着く二時間も前に、お絹は駅へ出掛けようとした。屋根裏の二階で、色々な事を考えているのが、息苦しくて仕方がなかつたから、駅で、うようよする人混みを見ていたら気が紛れるだらう、と思つたのであつた。

30

「一体、幾時の汽車なんだね?」

おえいが、**(注5)** へつついの上の壁に貼り付けた煤けた時間表を見ながら、声を掛けたが、お絹は聴えぬ振りをしていた。赤坊が一緒に出たがって泣いていた。「なんて、うるさい児だらう。」お絹は頭の中がごちゃごちゃになつていたので、べそつ掻き結構つていられなかつた。足の痛みは体だけが感じていて、頭の中までは上つて来なかつた。少し引摺り加減に歩いていながら、お絹はそれを知らなかつた。馬鹿のようになって、眼ばかり見張つて真直ぐに歩いてきた。乗合自動車、電車、自転車が蚊の鳴くような微かな唸りを立てて、かすめていた。それらはまるで、別の世界で唸っていた。頭の中では「如何したら宜かろう?」という何時までも答えの出ない循環小数が、どうどう廻りを遣つていた。

35

という何時までも答えの出ない循環小数が、どうどう廻りを遣つていた。

停車場では、様々なC 自働人形がうようよしていた。(注6) 赤切符で二等待合室に収まっているハイカラ令嬢や、俺のネクタイは如

何だい？ と体中で皆に聴いている若い男や、芸者を連れて旅行する事を人々に知らせたがっている禿茶瓶や、その他、他人の  
思わくばかりで動いている人間の集りであった。が、お絹はちつとも腹が立たなかつた。それらは皆、別の世界に住んでいた。

40 なんにもお絹の気を惹くものは無かつた。汽車が来た！ 光ったレールの上に、機関車の頭部が現われた瞬間に、お絹の臍の上  
から胸の方へ、固い棒のようなものがぐつとこみ上げて来た。(注8) 肉身に対する本能的な愛情が、泉のように湧いた。つい一瞬間前

まで、「如何して厄介払いをしたものだろう。」という事ばかり考えていた事が恥しかつた。そんな冷酷な考えを持ったのが自分  
だという事は、情けない事であつた。英二！ 英二！ お絹の眼の前に、茶縹の筒袖を着て、新しい、玩具のようにしやちこ  
張つた帽子を冠つて、畝道を学校へ行く、英二の子供姿の幻がかすめて通つた。次の瞬間には、その幻が「中学生」に出世してい

45 た。それは紺サージのちつとも継の当らない洋服を着て、光つた編上げを穿つていた。(注13) そして「今日のおやつは何かしら？」とい

う事以外には苦勞のない、ほがらかな顔をしていなければならなかつた。それが英二に対するお絹の偶像であつた。その偶像と  
お絹とは、ちよつと小綺麗な二階を借りて、楽しい巢を営むはずであつた。——これらの想像は、ほんの一瞬間にお絹の頭の中  
を過ぎたのであつた。然し、汽車の頭が駅に這入るすぐ手前のカーブに差掛つてから、蒸気が切れた、とでもいう風にぐずぐず  
していた。お絹はこんなろまな汽車を見た事がなかつた。が、到頭、けたたましい最後の叫声を挙げて止まつた。お絹は焼  
けつくような瞳で英二を探した。見知らない無数の首が、窓から出ていた。彼女にはなんの係りもない様な叫声が、喧しく呼び  
かわしていた。せわしない喜悲劇が騒然と幕を上げていた。やがて人々は、豆を煎るような音を立てて階段を上つて行つた。

50 英二はいないのか！ いた。それはなんとという情けない様子であつたらうか。お絹はもう少しで声を挙げるころであつた。  
二人が別れて九年経っている事を忘れていた。D 英二はもう玩具ではない。(注14) 村祭りには禪をかいて山車を担ぐ立派な若い衆で  
あつた。

55

「荷物は？」

「自分で持つて来た。」

英二はちよつと笑おうとした。厚い唇から馬鹿げて白い歯が出ていた。茶色の瞳が疑深く光っていた。それは、人に怖えた山猿の表情であつた。お絹は、何か親しい言葉を掛けて遣りたいと思ひながら、何にも言う事が出来なかつた。「さぞ疲れたでしょう？」と言う代りに、お絹は沈黙つて信玄袋の緒に手を掛けた。英二はそれを振払つて、自分で提げて歩き出した。

彼は横肥りの上に脊が低かつた。おまけに大人びた袂付の着物を着ていた。袋の重味で肩がシーソーのように揺れた。まるで、奴傭が踊っているようであつた。おどけた腰には、水色縮緬の二尺幅の帯がみせつけがましく捲きつけてあつて、垂れが尻の横つちよでぶらんぶらんしていた。

ちよつと、郵便車から行囊を引摺り出していた駄夫と、押車に腰を下していた赤帽とが、変なめくばせをした。そして、ちよつと間を置いて、悪意のある大笑いを浴せ掛けた。英二は、朴訥な恥しがりから、すばしこく感じていたが、振り返るのが恐ろしかつた。が、あとから、お絹が続いていた。お絹は、他人を嘲笑して楽しんでる彼等の下素根性を憎んだ。その上に、自分の弟が的になつていた。お絹は英二の側に寄つて、かばうような身構えをし、敵意のある眼で白眼み返した。その時は、向うの仲間が四、五人になつていた。貧乏娘の下手な挑戦は、ぼろを着たかがしが弓を引いているようであつた。彼等は面白がつて凱歌を挙げていた。お絹はその声を弟に聴かせたくなかつた。何かまるで別の話しを、国の様子をでも話し合おうとした。が、水色縮緬の帯と奴傭の袖とが、お絹の瞳から離れなかつた。

70 「もつと違つた帯は持つていないの？」

そう、聴いてみたくて堪らなかつた。「男手一つに育てられた。」と笑わせたくないという、老父の愛情が、その帯を腰に捲かせた事を、お絹はちつとも知らなかつたから。

75 E 二人は、逐い立てられるように、駅から出た。宿まで歩く間中、ちつとも口を利かなかつた。二人とも駅での出来事を気に病んでいた。その上に英二は、田舎訛りを笑われやしないか、と心配していたし、お絹は、弟の品定めを遣っている事を、気が付かれやしないかと恐れていた。然し、それでも宜かつた。二人は、お互い同士の心の底に湛えている湖のような愛情を信じていたから、それで満足していた。

(注)

- 1 綴方——作文のこと。
- 2 根限り——気力の続く限り。
- 3 二週間前の事——仕事を始めて間もなく、お絹は故郷から弟を呼び寄せて上級学校に通わせようと思ひ手紙を出していた。
- 4 ナッブル——東京にあつたナッブル時計工場。
- 5 へつつい——かまどのこと。
- 6 赤切符——汽車の三等乗車券のこと。最も安い切符。
- 7 禿茶瓶——つるんとした頭を茶瓶になぞらえて、あざけつてという言葉。
- 8 肉身——肉親と同じ。
- 9 筒袖——筒型の袖。ここではその袖の着物で、子供向き衣服。
- 10 しゃちこ張つた——ここでは体になじんでいない様子。
- 11 中学生——ここでは旧制中学校の生徒。義務教育ではなかつたため、進学は比較的裕福な家庭の男子に限られた。
- 12 紺サージ——ここでは中学校の制服のこと。「サージ」は生地の種類。
- 13 編上げを穿つて——足の甲から足首までをひもで×字に編んで締める、深い編み上げ靴をはいて。
- 14 禪をかいて——禪を身につけて。
- 15 信玄袋——底板があり、口をひもで締めて持ち運ぶ比較的大型の布袋。
- 16 奴風——人が両腕を広げた形に作つた風。
- 17 水色縮緬の二尺幅の帯——縮緬素材でできた男性や子供が用いるやわらかい帯。
- 18 行囊を引摺り出していた駅夫——行囊は郵便物を入れて運び送る袋。駅夫は当時の駅員の一種。
- 19 赤帽——駅で乗降客の手荷物を運ぶ人。
- 20 かがし——かかしのこと。

問 1 傍線部(ア)・(イ)の語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ

つ選べ。解答番号は  ・  。

(ア) にべもなく

- 
- ④ すげなく  
③ そつなく  
② しがなく  
① あえなく

(イ) すばしこく

- 
- ④ あざとく  
③ のぶとく  
② めざとく  
① しづとく

問2 傍線部A「この仕事はお絹に、人知れぬ喜びを齎してくれた。」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

14。

- ① 弟が自分に向けて懸命に書いたことがよく伝わり、余計な言葉がないかわりに故郷の実家の状況や父の日常の様子がありありと感じられるから。
- ② 弟の手紙の少ない言葉から様々な想像を広げることができ、それを読む時間が日々のつらい労働を忘れさせる大切なひとときに感じられるから。
- ③ もともとは習字や作文があまり得意ではなかった弟が、遠く離れた自分に手紙を書き続けることで少しずつ上達していく様子が実感できるから。
- ④ 文章や文字を書くことが必ずしも得意ではない弟の簡素な文面から、家族や故郷の様子を工夫して読み取っていくことに張り合いを感じるから。

問3 傍線部B「お絹は情けない顔をして」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 15。

- ① 苦しい生活に弟までもが加わることになる不安や焦りからおえいに思わず声を掛けたが、その返事が何の役にも立たず、すでに弟が故郷を出発していて手立てがない事態に困り果てているから。
- ② ただでさえミシン屋の巧みな言葉に乗って窮地に立たされているが、何ら有益な助言を受けられないままに弟を受け入れざるをえない苦しい状況の原因としておえいを恨めしく思っているから。
- ③ 念のため家主のおえいに弟の上京を伝えておこうと声を掛けたが、取り合ってすらくれない彼女の様子を前に、もう弟は汽車で東京に向かっていると告げることに申し訳なさを感じているから。
- ④ 急に上京してくる弟にどのように対応したらいいのか途方に暮れているが、つまらない虚栄心からおえいに素直に援助を求めることもできず、そのような自分に対して愛想を尽かしているから。

問 4 傍線部 C「自働人形」とあるが、それは停車場の人々のどのようなあり方をたどった表現か。その説明として最も適当なもの

のを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 16。

- ① 周囲の評価ばかりを気にして自身の本来持つ美感や信念に従って行動することできない、常に他者が生み出した価値観や流行に従っているような浅薄なあり方。
- ② 金銭的余裕から一見得意だが実は自身で判断する能力を失っていて周囲に誰かいないと行動を起こすことができない、主体性を放棄したような受動的なあり方。
- ③ 装飾品や同行する人々を必要以上に誇示するばかりでありのままの自己の価値を高めようとしなく、自らの外面を飾ることばかりに執心するような横着なあり方。
- ④ 華美な衣服を身につけるなどして自分をよく見せようとしているがそれが自己の内面と結びつかない、他人からの羨望のみを意識してふるまうような空虚なあり方。

問5 傍線部D「英二はもう玩具ではない。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の①～

④のうちから一つ選べ。解答番号は

17。

① お絹は英二のことを生活の苦勞を知らないかわいい弟と考え、いつか呼び寄せて二人で楽しく暮らすことを夢見ていた。しかし上京した現実の彼は長く村の生活に関わってきた一人の若者であり、ともに暮らしていけそうな相手ではなくなっているということ。

② お絹はこれまで英二のことをあどけない子供、愛らしい弟と考え、そこに自身の理想を重ねてその姿を思い描いていた。しかし目の前に現れた現実の彼は十分に成長した一人の若者であり、もはや自分の思い通りにできる存在ではなくなってしまったということ。

③ お絹は英二が離れていた九年の間に地元で中学校へと進学し、服装もそれに応じて立派に変化しているものと考えていた。しかし汽車から降りてきた現実の彼は労働や地元の祭りに従事する村の若者風の容姿であり、お絹の理想からはかけ離れているということ。

④ お絹は別れる前に見た英二の服装のうち、特に真新しい帽子のことを無邪気な弟の象徴としてずっと覚えていた。しかし久々に再会した現実の彼は姉の思いをよそにそんな帽子をかぶってはおらず、彼女と心が通わない一人の若者になってしまったということ。

問6 傍線部E二人は、逐い立てられるように、駅から出た。」とあるが、ここでの英二とお絹の心情の説明として最も適当な

ものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

18。

① 英二は駅での一件に加え、今度は言葉の訛りが嘲笑の的になってしまふことを懸念している。お絹は、そのように自分たちに悪意をもつて迫ってくる笑い声をかき消してやりたいと思う一方、話したくないという英二の気持ちが態度の端々から伝わってくるため、声を掛けるのをためらっている。

② 英二は父親が自分のために選んで着せてくれた帯を笑われて、何も言えなくなるほどに胸を痛めている。お絹は、そのように他人の身なりを嘲笑する行為を品性に欠けた恥ずべきものと思う一方、自分もまたその帯や着物の不格好さが気になって仕方がなく、他の話題が見つけれないでいる。

③ 英二は都会の人々の他人を見る目の厳しさにひるみ、平静な態度で姉に接することができないでいる。お絹は、そのようによそから来た者をおびえさせる嘲笑から弟を守りたいと思う一方、自分自身もいつも田舎者に厳しい目を向けているため、それを英二に知られないように冷静を装っている。

④ 英二は駅で受けた嘲笑を引きずって、都会の人々が自分に向ける視線に萎縮してしまっている。お絹は、そのように地方から出てきた者を嘲って娯楽の種にする態度を憎々しく思う一方、自分もそのような人々と同じような視線で弟を見ていることを自覚し、そのことに後ろめたさを感じている。

問7 本文の表現上の特徴についての説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は

19

20

- ① この文章はお絹の視点を中心に叙述されているが、「世話をして遣らなければなるまい、と、ひそかな親切心で思い廻らしていた」(26～27行目)や「老父の愛情が、その帯を腰に捲かせた」(71～72行目)という部分では、お絹の外部の事象に関しても、彼女の認識によらない俯瞰的視点から記述されている。
- ② 「足の痛みは体だけが感じていて、頭の中までは上って来なかった」(33行目)や「お絹の臍の上から胸の方へ、固い棒のようなものがぐつとこみ上げて来た」(40～41行目)という部分では、身体表現を用いてお絹の感情の動きを躍動的に描き出し、彼女の内面からあふれ出る弟への気遣いを強調している。
- ③ 「乗合自動車、電車、自転車が蚊の鳴くような微かな唸りを立てて、かすめていた。それらはまるで、別の世界で唸っていた」(34～35行目)という部分では、普段お絹が都会の様々な音に取り囲まれて日々を過ごしていること、一方でこのときはそれらを意識する余裕のないことが示唆されている。
- ④ 「駅に這入るすぐ手前のカーブに差掛つてから、蒸気が切れた、とでもいう風にぐずぐずしていた」(48～49行目)や「到頭、けたたましい最後の叫声を挙げて止まった」(49行目)という部分では、汽車を擬人化した表現でお絹の思いとは無関係に時間が流れてしまう現実の残酷さを映像的に表現している。
- ⑤ 「見知らない無数の首が、窓から出ていた」(50行目)や「やがて人々は、豆を煎るような音を立てて階段を上って行った」(51行目)という部分では、人々の姿を無機的な物質であるかのように描くことで、英二と同じ汽車に乗って来た人々に対して向けられているお絹の関心の強さを効果的に表している。
- ⑥ 「まるで、奴風が踊っているようであった」(60～61行目)や「水色縮緬の帯と奴風の袖とが、お絹の瞳から離れなかった」(69行目)という部分では、「奴風」という同じ語を繰り返し用いることで、英二のおどけた様子とそれをほほえましく見つめるお絹の姿とが読者に印象的に映るように工夫している。

### 第3問

Aさんのクラスでは、自分で設定したテーマについてレポートを書く授業が行われている。生活習慣に関心があったAさんは、次の【資料Ⅰ】の内容に興味を持ち、レポートのテーマを「午前中の調子を左右する要因」にすることとした。テーマに関連するものとして後の【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】を集めたAさんは、現在、各資料についての分析を行っている。これらを読んで、後の問い(問1～4)に答えよ。(配点 20)

#### 【資料Ⅰ】高校生の朝食並びに仮眠に関するグラフ

\*nは回答者数を表している。グラフ中の数字は四捨五入のため合計が100%にならない場合がある。

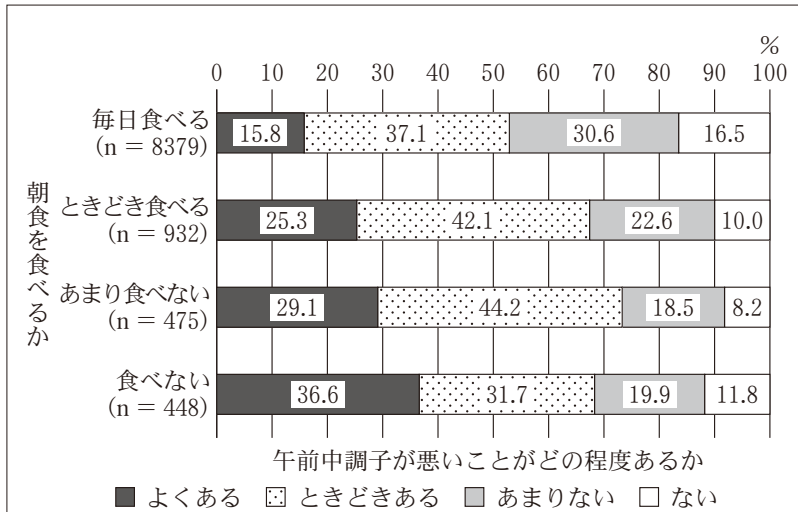


図1 朝食摂取と午前中の調子の関係

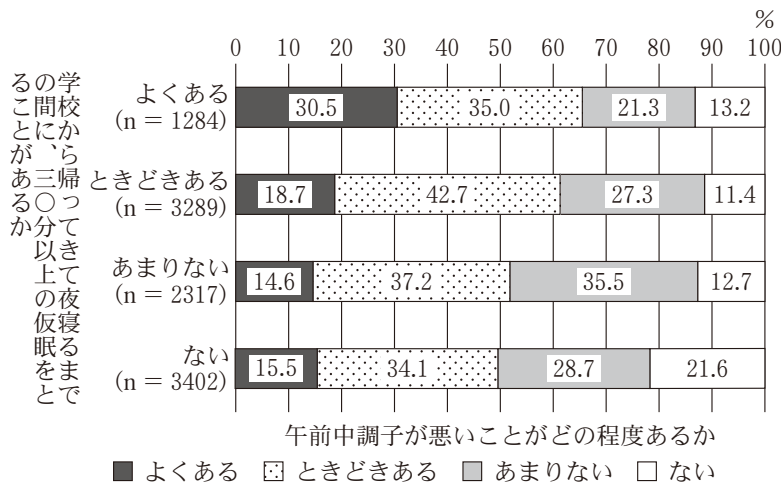


図2 学校から帰ってきて夜寝るまでの間の30分以上の仮眠と午前中の調子の関係

(文部科学省「平成26年度『家庭教育の総合的推進に関する調査研究』」の資料をもとに作成)

## 【資料Ⅱ】朝食に関する文章

朝食には大事な役割がある。朝食をとると、体内時計が動き始めることが近年わかってきた。脳にある「主時計」(親時計ともいう)が、体中にたくさんある「末梢<sup>まつしやう</sup>時計」(子時計ともいう)を統御している。

ヒトの体内時計は1日24.5時間と言われる。そのまま放置すると1日0.5時間のずれが生じるが、体内時計にはある刺激によってリセットされる機能が備わっている。

主時計をリセットさせるのは、強い光。朝起きて太陽の光を目の網膜に映すと、その光の刺激が脳に届き、睡眠・覚醒リズムや体温や血圧のリズム、ホルモン分泌リズムなどをつくりだす。末梢時計は肝臓、腎臓、胃、腸などさまざまなおところにある。朝食は、主に肝臓の末梢時計をリセットするのに大事な働きをしている。

かまたみのる  
(鎌田 實「おすすめ『朝タン』に卵」(「毎日新聞」2024年10月27日朝刊)による)

## 【資料Ⅲ】仮眠に関する文章

夕方帰宅後に仮眠をとることで、その後頭がすっきりしますが、その分、夜寝る時刻が遅くなり、体内時計のリズムが夜型化することになります。また、夜の寝つきが悪くなるとともに、眠りが浅くなり、結局睡眠不足をもたらします。その結果、翌日の日中に眠気が生じ、また夕方の帰宅後に仮眠が必要になるという悪循環となります。

人が眠くなる仕組みには、体内時計のリズムによるものとは別に、睡眠不足や脳の使い過ぎなどにより疲れた脳を休ませるためのものがあります。夕方に寝ると脳の疲れが回復し眠気が減るため、夜の眠りが浅くなるのです。

夕方眠気を感じる場合には、睡眠不足の状態になっている可能性がありますので、夜は早めに寝て十分な睡眠時間を確保した上で、朝食前に勉強をするのも効果的です。

なお、午後3時前までの時間帯に20分以内でとる「短い昼寝」は頭をすっきりさせる効果があり、夜の睡眠に対する影響も小さいことが分かっています。このときベッドなどで長く眠ると眠りが深くなり、脳と身体が休息モードになってしまい、かえって頭がぼんやりするため注意が必要です。

(文部科学省「早寝早起き朝ごはんて輝く君の未来～睡眠リズムを整えよう!～」による)

問1 【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】から読み取れることの説明として適当なものを、次の①～⑥のうちから二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は 

21
----

 ・ 

22
----

 。

- ① 【資料Ⅰ】図1から、朝食を「毎日食べる」と回答した人のほうが、朝食を「食べない」と回答した人よりも、午前中の調子が悪いことが「ない」と回答した割合が大きいが読み取れる。
- ② 【資料Ⅰ】図1から、朝食をとる頻度が低くなるにつれて、午前中の調子が悪いことが「よくある」と回答した人と「ときどきある」と回答した人の割合の合計が大きくなっていることが読み取れる。
- ③ 【資料Ⅰ】図2から、学校から帰ってきて夜寝るまでの間に三〇分以上の仮眠をとる頻度が高くなるにつれて、午前中の調子が悪いことが「ない」と回答した人の割合が大きくなっていることが読み取れる。
- ④ 【資料Ⅰ】図2から、学校から帰ってきて夜寝るまでの間に三〇分以上の仮眠をとることが「よくある」と回答した人のなかでは、午前中の調子が悪いことがどの程度あるかという質問に「ない」と回答した人の割合が最も小さいことが読み取れる。
- ⑤ 【資料Ⅱ】から、朝食をとることで体内の末梢時計の一部がリセットされ、そのことがほかの末梢時計や主時計の始動に影響を及ぼし、ずれが生じた体内時計のリズムを整えることが読み取れる。
- ⑥ 【資料Ⅲ】から、午後三時前までの時間帯に二〇分以内の短い仮眠をとるよりも、夕方の帰宅後に二〇分以上の仮眠をとるほうが、使い過ぎなどによって疲れた脳の回復には効果があることが読み取れる。

問2

【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】に関する分析として適当でないものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

23

- ① 【資料Ⅰ】の図1と図2を見ると、朝食をとることで学校から帰ってきて夜寝るまでの間に三〇分以上の仮眠をとることが、それぞれ午前中の調子に係るのではないかと思えるところがある。しかし、朝食を毎日とる人やこの種の仮眠をとることがない人でも、午前中の調子が必ずしもよいわけではないことが確認できる。以上の理由から、【資料Ⅰ】のみを取り上げて、午前中の調子を左右する要因について結論づけることは難しい。
- ② 【資料Ⅰ】図1を見ると、朝食をとるかどうかが午前中の調子に影響を及ぼすのではないかと思えるところがある。しかし、【資料Ⅱ】からは、朝食をとることで体内時計が動き始めるということは読み取れるものの、朝食をとることが午前中の調子の向上に直接つながるといふ記述までは確認できない。以上の理由から、【資料Ⅰ】図1と【資料Ⅱ】のみを取り上げて、午前中の調子を左右する要因について結論づけることは難しい。
- ③ 【資料Ⅰ】図2を見ると、学校から帰ってきて夜寝るまでの間に三〇分以上の仮眠をとることで午前中の調子との間に関連があるのではないかと思えるところがある。しかし、【資料Ⅲ】からは、この種の仮眠は夜の眠りを浅くしてしまうということは読み取れるものの、夜の眠りが浅くなる原因に関する記述は確認できない。以上の理由から、【資料Ⅰ】図2と【資料Ⅲ】のみを取り上げて、午前中の調子を左右する要因について結論づけることは難しい。
- ④ 【資料Ⅱ】からは、朝食が体内時計をリセットすることが、【資料Ⅲ】からは、夕方帰宅後の仮眠によって体内時計のリズムが夜型化することが確認できる。どちらの資料も体内時計について触れてはいるものの、相互に補完し合う内容ではないため、朝食や仮眠を含めた体内時計の全体像を理解することができない。以上の理由から、午前中の調子を左右する要因について、【資料Ⅱ】と【資料Ⅲ】を組み合わせる結論づけることは難しい。

【資料Ⅳ】新聞部員Xによる大学生Yに対するインタビュー記事

X…本日は、Yさんの大学で行われている安価で朝食を食べられるという「朝食支援」について、内容と感想、今後の期待の順にお話を伺いたいと思います。まず、支援の内容についてお聞かせいただけますか。

Y…はい、講義の前に、希望する学生が食堂で安く朝食を食べることができます。朝食のメニューは、パンと牛乳、ご飯とみそ汁のほか、日替わりのおかずを選ぶことができます。

X…いつからこの朝食支援を利用していますか。

Y…1年生の途中からです。朝食支援を利用する前は、夜更かしをすることがあり、出かけるギリギリまで寝て、朝食を食べずに始業直前の教室に入ることもありました。生活が不規則で、朝の調子もよくありませんでした。でもあるとき、ポスターでこの企画を知って、「バランスのとれた朝ご飯が、こんな値段で食べられるなら行ってみよう」と思いました。

X…実際に、朝食支援を受けてみた感想を教えてください。

Y…毎日朝食を食べられるのが素直にうれしいです。午前中の調子もよくなったように思います。それから、生活習慣にも変化がありました。朝食を食べるために朝早く起きるようになったんです。夜も早く眠くなるので早寝が定着して、睡眠時間が確保できるようになりました。以前は午後の眠気がひどくて夕方長く寝ていたのですが、それもなくなりました。

X…なるほど。生活習慣を整えるという点でも、朝食支援の取組みが役立っているということですね。

Y…はい、朝食支援の取組みにはいいところがたくさんあります。でもたまに友人との付き合いで寝るのが遅くなってしまいうこともあります。そういったときは朝食を食べる気になりません。朝食支援は生活習慣を整えるきっかけにはなりますが、自分でも生活リズムを整える必要がありますね。

X…今後、この取組みに期待することはありますか。

Y…はい、日替わりのメニューがもっと増えるといいですね。

X…とても参考になりました。本日はありがとうございました。

問3 Aさんは、レポート作成に向けて新たな資料が必要であると考え、次の【資料Ⅳ】を追加した。この資料はAさんの高校の新聞部が発行している学校新聞に掲載されていた記事である。【資料Ⅳ】をレポートに用いる方針として最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

24

- ① 【資料Ⅳ】から、朝食をとらないことで午前中の不調を招くことがあると読み取れる。このことと【資料Ⅱ】を関連づけ、朝食をとらなければ肝臓の末梢時計はリセットされないことの根拠として【資料Ⅳ】を示す。
- ② 【資料Ⅳ】から、朝食支援を受けることにより午前中の調子がよくなったと感じることがあると読み取れる。このことと【資料Ⅰ】図1を関連づけ、朝食と午前中の調子が関係している事例として【資料Ⅳ】を示す。
- ③ 【資料Ⅳ】から、朝食支援の利用をきっかけに仮眠をとらなくなることがあると読み取れる。このことと【資料Ⅰ】図2を関連づけ、朝食摂取が仮眠の抑制に効果があることの事例として【資料Ⅳ】を示す。
- ④ 【資料Ⅳ】から、朝食支援だけでは生活リズムを整えることが難しい側面が読み取れる。このことと【資料Ⅲ】を関連づけ、生活リズムの改善には適切な仮眠が必要であることの根拠として【資料Ⅳ】を示す。

【メモ】レポート執筆に向けての現状の整理

◎レポートのテーマ：「午前中の調子を左右する要因」

- (ア) 朝食と仮眠(睡眠)のいずれもが午前中の調子を左右する要因になるということについて、【資料Ⅰ】～【資料Ⅲ】だけでは十分に論じることが難しかった。しかし【資料Ⅳ】を入手したことで、高校生と大学生の比較を通して、両者にとっての朝食と仮眠(睡眠)の重要性がどう変化するかを指摘できるようになった。
- (イ) 今回は、一つの資料をきっかけに、関心を持ったことについて自分でテーマを定め、資料を集めて精査した。これからレポートの構成案を作り、集めた各資料の生かし方を具体的に考える。
- (ウ) 朝食と仮眠(睡眠)以外にも、午前中の調子を左右するさまざまな要因が考えられる。現段階では朝食と仮眠(睡眠)以外の資料がないため、テーマに関する先行研究を読んだり、研究に基づく資料を探したりしながら、ほかの要因についての情報を収集する必要がある。
- (エ) 今回、午前中の調子を左右する要因を考えることができたが、結果として午後の仮眠(睡眠)も考慮しなければならないことがわかった。今後は、朝食をとることが仮眠(睡眠)にどのような影響があるかを考察することで、より説得力のあるレポートが書けるだろう。

問 4 Aさんは、レポートの執筆に向けて現状を整理した【メモ】を作成した。【メモ】のなかにある(ア)～(エ)は、正しい内容のもの、と誤った内容を含むものがある。正しい内容のもの組合せとして最も適当なものを、次の①～⑥のうちから一つ選べ。解答番号は

25。

⑥ ⑤ ④ ③ ② ①  
ウ イ イ ア ア ア  
・ ・ ・ ・ ・  
エ エ ウ エ ウ イ

## 第4問

次の文章A～Cはそれぞれ、室町時代の歌人である正徹の『正徹物語』のうち、歌の詠み方について述べた箇所である。これらを読んで、後の問い(問1～4)に答えよ。(配点 45)

A 初心のほどは、さのみくひほり入りて案ぜずとも、颯々とやすく詠みならふべきなり。いかに骨を折りたれども、位さだま  
りたれば、上から見ればア さしたることもなきなり。いかに案じたりとも、我が位ほどなる歌ならでは出で来ぬものなり。

ある人の歌三首に二首は本歌を取る様に詠めることわろし。上古も本歌を取ることをば大事にして候ふ。上手の位になり  
て、恋・雑を季になし、季を恋・雑に取りなし、句の置き所をかへなどして、心を別のものに詠みなしけるなり。初心の時、  
本歌を取れば、わづかに句の置き所をかへたれども、心は同じものなり。されば初心にて本歌を取ること、斟酌あるべきこ  
となり。

B 得たる者の歌は、何事をいひ出でたるも、一ふしの興ありて面白きなり。初心の者これを見て、心にうらやましく思ひて、  
詠み似せむとすれば、無心所着の何ともなくほれたることを詠み出だすなり。「これはイ 何をあそばし候ふぞ」と人が尋ぬれ  
ば、「我もえ知らず」といひて、たはごとを詠むなり。よくよく慎むべきことなり。初心の時、ただうちむかひて、一首がさ  
はさはと理のきこゆるやうに詠むべきなり。その位にも至らずして、達者のまねをすれば、をかききこと出で来るなり。

C 了俊常に申されしは、「我、若年の頃、連歌を稽古し侍りしに、よくもなき句を多くせむよりは、五句三句なりとも、我が  
本意の連歌をすべしと思ひて、句数を少なく申し侍りしを、摂政殿きこしめして、了俊の状をささげられし時、その状の奥を  
引きかへして、『御辺のこの間よき連歌をすべしとて、句数少なくせらるるよし聞き侍り。しかるべからざることなり。一句  
二句をみがきて、随分よき連歌と存ずれども、上の人の目から見れば、まだ初心の田地にて、さらによき句にてはなきなり。  
されば初心のほどは、いかにも多く口軽にしもてゆけば、自然に上手にもなるなり』とこのほか御折檻ありし」とて、予がよ

き歌を詠まむとするとして、文書をして折檻ありしなり。

常には摂政殿の御誼(注16)を申し出だして、「これが(ウ)いかめしき御恩なり」と申されけり。

(注) 1 くひほり入りて——深く掘り下げて。

2 颯々と——あっさり。

3 本歌を取る——先人の歌をもとにして別の新しい歌を作ること。本歌取り。「本歌」はそのもとの歌。

4 上古——ここでは平安時代以前のこと。

5 恋・雑を季になし——「恋」「雑」「季」は和歌集における内容分類。「季」は春・夏・秋・冬。

6 斟酌——ここでは差し控えること。

7 無心所着——歌論の用語で、一首の意味が通らないこと。

8 ほれたること——ぼやけたこと。

9 了俊——今川了俊。正徹の師。

10 連歌——和歌の上の句(五・七・五)と下の句(七・七)を交互に連ねていく文芸。

11 撰政殿——二条良基(よしもと)。連歌の大成者。

12 その状の奥を引きかへして——了俊が出した書状の余白に撰政殿が返事を書いたということ。

13 御辺——あなた。

14 田地——境地。

15 折檻——ここでは厳しく叱ること。

16 御誼——貴人の言葉。仰せ。

問 1 傍線部(ア)～(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は

26

28

(ア) さしたることもなきなり

26

- ① かつてそのようにさせたこともないのである
- ② 特にこれというほどのこともないのである
- ③ 心にこうと決めたこともないようだ
- ④ 自らそのようにしたこともないようだ

(イ) 何をあそばし候ふぞ

27

- ① 何についてお詠みになりましたか
- ② どのような詠み方を試みられたのですか
- ③ なんとひどい詠みようではありませんか
- ④ どうしてこのように詠まれたのですか

(ウ) いかめしき御恩

28

- ① ありがたいお引き立て
- ② 荒々しいお励まし
- ③ 畏れ多いご忠告
- ④ 重苦しいお心遣い

問2 文章A・文章Bの内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

29。

- ① 初心者のうちは、いくら努力しても自分の名声を高める優れた和歌を詠み出すことは難しいので、無理をせずに自分の実力に見合った和歌を詠むのがよい。
- ② 初心者であっても、時には趣深い和歌を詠むこともあるが、そのような幸運な人の真似まねを安易にしようとすると、支離滅裂で意味の通らない和歌になってしまう。
- ③ 初心者が下手な和歌を詠んでしまったとき、自分でもその理由が分からないなどと開き直るのではなく、達人に向かってきちんと理屈を説明するべきである。
- ④ 初心者の場合は余計な工夫をしようとせず、すらすらと筋が通るように和歌を詠むべきであり、達人の域に至っていないのにその模倣をするべきではない。

問3 文章Cで、了俊が正徹に語った内容に関する説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。解答番号は

30。

- ① 了俊は若い頃、自分の思いを率直に詠めるように稽古すべきと考え、「句数を少なく申し侍りし」とあるように、連歌の句数を少なくすることを摂政殿に提案した。
- ② 了俊が世評にとらわれない独自の連歌を目指していたことに対して、摂政殿は「よき連歌をすべし」と、誰もが認める優れた連歌を作らなければならないと指導した。
- ③ 了俊の連歌に対する向き合い方について、摂政殿は「しかるべからざることなり」と、少数の良い句を作ろうとする練習方法はあってはならないことだと注意した。
- ④ 摂政殿は一つの句に技巧を凝らそうとする了俊に、「さらによき句にてはなきなり」とあるように、初心者が熟考しても混乱してますます悪い句になると批判した。
- ⑤ 摂政殿は了俊に対して、「いかにも多く口軽にしもてゆけば」とあるように、どんなに句数は増えてもよいので、自分のところに多くの句を持つてくるように命じた。

#### 問 4

Sさんは、文章Aにある「上手の位」の人が行う本歌取りについて具体的な例を知りたいと考え、教師に相談した。教師は次の【資料】を用意し、正徹が高く評価していた鎌倉時代の歌人である藤原定家さだいえに、『古今和歌集』の和歌Iを本歌取りして詠んだ和歌II・和歌IIIがあることを示した。後の「フート」はSさんが【資料】をもとに考えをまとめたものである。これらを読んで、後の(i)・(ii)の問いに答えよ。

#### 【資料】

I 名取川なとりがは瀬々せせの埋もれ木あらはればいかにせむとかあひ見そめけむ(『古今和歌集』恋歌三・よみ人知らず)

(名取川の浅瀬の水面に埋もれ木が姿を現すように、私たちの関係が世間に知られたらそのときは一体どうするつもりでひそかに逢あいはじめたのだろうか)

II 名取川春の日数はあらはれて花にぞ沈む瀬々の埋もれ木(『続後撰和歌集』春歌下・藤原定家)

III 名取川いかにせむともまだ知らず思へば人をうらみけるかな(『続拾遺和歌集』恋歌三・藤原定家)

\*『古今和歌集』は平安時代、『続後撰和歌集』『続拾遺和歌集』は鎌倉時代の勅撰和歌集。

#### 「フート」

・文章Aには本歌取りに関する注意事項が述べられていたが、これに基づいて【資料】の和歌を確認すると、  
X ことが分かった。

・文章Aでは「初心」の人が本歌を取ると「心は同じもの」になると述べられていたが、藤原定家の場合はどうであったか。

【資料】の和歌を本歌との関係に注目して改めて分析すると、  
Y ことが分かった。

・藤原定家が詠んだ本歌取りの和歌を分析することで、「上手の位」の人がどのように本歌取りを行ったか理解が深まり、正徹が彼を高く評価したことも納得できた。

- (i) 空欄 **X** に入る、文章 A の解釈とそれに基づく【資料】の分析として最も適当なものを、次の ① ～ ④ のうちから一つ選べ。解答番号は **31** 。

- ① 和歌Ⅱ・和歌Ⅲはいずれも、和歌Ⅰから「名取川」を含めて複数の語句をそれぞれ取り入れている。このように複数の語句を本歌から取り入れることは、上級者のみが可能である
- ② 和歌Ⅱ・和歌Ⅲはいずれも、平安時代に成立した『古今和歌集』にある和歌Ⅰを本歌としている。このように上級者であっても、平安時代以前に詠まれた和歌を本歌とすべきである
- ③ 和歌Ⅱは、恋の歌である和歌Ⅰの語句を複数用いつつも内容を春の歌に変更している。このように上級者であれば、恋や雑の歌を本歌取りして季節の歌に変えることができる
- ④ 和歌Ⅲは、本歌である和歌Ⅰでは下の句にあった「いかにせむ」を上句に移動させている。このように言葉の配置を変えることは、上級者以外が行うのは避けるべきである

(ii) 空欄

Y

に入る、【資料】の分析として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

32

- ① 「あらはれば」と恋仲が世間に知られることを仮定していた和歌Ⅰに対して、和歌Ⅱは、「あらはれて」と春の時間の経過とともに二人の仲も世間に知られたという内容に変えている。このように、本歌である和歌Ⅰの「心」とどまらず、恋の内容を織りませた新たな季節の歌を詠んでいる
- ② 「名取川瀬々の埋もれ木」を序詞として比喩的に用いていた和歌Ⅰに対して、和歌Ⅱは、それを実際の景色として、「花にぞ沈む」と舞い散る花により埋もれ木がこれ以上沈んだら困ると詠んでいる。このように、本歌である和歌Ⅰから恋の「心」を取り除き、春の歌となるよう工夫を施している
- ③ 「いかにせむ」と恋仲が世間に知られることを心配する和歌Ⅰに対して、和歌Ⅲは、「人をうらみけるかな」と世間に知られる不安よりも恋人への恨めしさに重点を置いた歌にしている。このように、本歌である和歌Ⅰの「心」をふまえた同じ恋の歌でありつつも、内容に変化を加えている
- ④ 「埋もれ木」を用いて春の恋を表現していた和歌Ⅰに対して、和歌Ⅲは、季節に関する表現を用いず、「まだ知らず」と失恋は未経験だが仮に恋人と別れたらどれほど相手を恨むだろうかと想像している。このように、本歌である和歌Ⅰの「心」とらわれず、自由な発想で恋の歌を詠んでいる

第5問

次の「文章Ⅰ」と「文章Ⅱ」は、『論語』の「己」に如かざる者を友とすること無かれ。」という言葉について、蘇軾（一〇三六一—一〇四一）と王夫之（一六一九—一六九二）の見解をそれぞれ示したものである。これらを読んで、後の問い（問1〜7）に答えよ。なお、設問の都合で返り点・送り仮名を省いたところがある。（配点 45）

【文章Ⅰ】

蘇氏曰、「世之陋者、樂以下不己若者為友、則自足而日損、故以此戒之。是謂不以文害辭、不以辭害意。如必勝己而後友、則勝己者亦不吾友矣。」

（朱熹『論語或問』による）

【文章Ⅱ】

恒人之病、樂友不如己者、以自表暴、而忌勝己者、不與之友。故切以為戒。

人之氣質互有勝劣。動靜剛柔、相交為勝、忌其相勝、則取近己之偏者、而與友。近己之偏、則固不如己矣。以其動

振<sup>ル</sup>己<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>静<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>静<sup>ク</sup>節<sup>シ</sup>己<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>動<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>剛<sup>ク</sup>輔<sup>ニ</sup>己<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>柔<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>柔<sup>ク</sup>抑<sup>レ</sup>己<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>剛<sup>ク</sup>則<sup>チ</sup>雖<sup>モ</sup>賢<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>カ</sup>己<sup>ニ</sup>而<sup>レ</sup>皆<sup>シ</sup>勝<sup>ル</sup>己<sup>ニ</sup>者<sup>ナリ</sup>矣<sup>。(ウ)</sup>凡<sup>レ</sup>見<sup>テ</sup>為<sup>レ</sup>如<sup>ク</sup>己<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>皆<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>カ</sup>己<sup>ニ</sup>者<sup>也</sup>。從<sup>ニ</sup>己<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>偏<sup>ニ</sup>己<sup>ニ</sup>既<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>一<sup>ニ</sup>偏<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>長<sup>ク</sup>矣<sup>。B</sup>彼<sup>レ</sup>無<sup>ク</sup>能<sup>ク</sup>益<sup>ス</sup>而<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>獎<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>益<sup>ス</sup>偏<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>謂<sup>フ</sup>不<sup>レ</sup>如<sup>カ</sup>己<sup>ニ</sup>。

(王夫之『船山遺書』による)

(注) 1 蘇氏——蘇軾のこと。

2 陋——あさはかなこと。

3 謂<sup>フ</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>文<sup>ノ</sup>害<sup>ス</sup>辭<sup>ヲ</sup>不<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>辭<sup>ノ</sup>害<sup>ス</sup>意<sup>ヲ</sup>——一つ一つの語句や、文の字面の意味にこだわって、文の主旨をとらえ損なってはいけないことを言う。

4 恒人——普通の人。

5 表暴——誇る。

問 1 波線部ア「如」について、ここでの意味と同じ意味で用いられる漢字として最も適当なものを、次の①～④のうちから

一つ選べ。解答番号は 33。

- ④ 若    ③ 唯    ② 初    ① 並

問 2 波線部イ・ウのここでの意味として最も適当なものを、次の各群の①～④のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答

番号は 34 ・ 35。

(イ)

- 34 「固」
- ④ ③ ② ①
- もともと    結局は    おのずと    実際に

(ウ)

- 35 「凡」
- ④ ③ ② ①
- いくらか    やはり    おそらく    すべて

問3 二重傍線部 a 〽 c 而の用法の組合せとして最も適当なものを、次の① 〽 ④のうちから一つ選べ。解答番号は

36。

- |   |   |    |   |    |   |    |
|---|---|----|---|----|---|----|
| ① | a | 逆接 | b | 順接 | c | 逆接 |
| ② | a | 順接 | b | 順接 | c | 逆接 |
| ③ | a | 順接 | b | 逆接 | c | 順接 |
| ④ | a | 逆接 | b | 逆接 | c | 順接 |

問4 【文章I】で蘇軾は、「己に如かざる者を友とすること無かれ。」を文字通りに解釈して行動すると問題が生じると考えてい

る。その問題を説明した文として最も適当なものを、次の① 〽 ⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 37。

- ① 自分より優れた人とばかり友となるということ。
- ② 自分より劣った人と友となれなくなること。
- ③ 自分と同水準の人とばかり友となるということ。
- ④ 自分と同水準の人と友となれなくなること。
- ⑤ 自分より優れた人と友となれなくなること。

問5 傍線部A「交相為<sub>レ</sub>勝」の説明として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 38。

- ① たとえば動と静のように相反する性質は、ある面では動が静より優れ、別の面では静が動より優れるように、それぞれ優れた面を持つということ。
- ② たとえば動と静のように相反する性質は、つねに動が静より優れているように、一方が他方に対して優れるという関係が定まっているということ。
- ③ たとえば動と静のように相反する性質は、人間には動の面と静の面が両方備わっているように、共存してこそ初めて優れたものになるということ。
- ④ たとえば動と静のように相反する性質は、動いている時は静止しておらず、静止している時は動いていないように、互い違いに表れるということ。

問6 傍線部B「彼無能益而相奨以益偏」の返り点の付け方と書き下し文との組合せとして最も適当なものを、次の

①～④のうちから一つ選べ。解答番号は 39。

- ① 彼無<sub>レ</sub>能益而相奨<sub>二</sub>以益偏 彼の能く益<sub>ま</sub>して相奨<sub>あひすす</sub>むること無くして以て益<sub>えき</sub>偏る
- ② 彼無<sub>レ</sub>能益而相奨<sub>二</sub>以益偏 彼の能く益<sub>ま</sub>すこと無くして相奨<sub>あひ</sub>めて以て益<sub>ますま</sub>偏る
- ③ 彼無<sub>レ</sub>能益而相奨<sub>二</sub>以益偏 彼は無能にして益<sub>ま</sub>すも相<sub>たす</sub>け奨<sub>あひ</sub>むるに益<sub>えき</sub>を以て偏る
- ④ 彼無<sub>レ</sub>能益而相奨<sub>二</sub>以益偏 彼は能く益<sub>ま</sub>し相<sub>たす</sub>くる無く奨<sub>あひ</sub>むるに益<sub>えき</sub>を益<sub>ます</sub>すを以てす

問7

「己に如かざる者を友とすること無かれ。」という言葉をめぐって、【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】で蘇軾と王夫之はどのような考えを示しているか。それを説明した文として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。解答番号は

40

① 蘇軾は、この言葉を自己中心的な者が他者にしばしば無関心であることを戒めるものと考えている。王夫之は、自分と対立する性質を持つ者も、その点だけでは自分との優劣を判断できないので、「友とする」上では優劣の判断を複数の視角で行うべきと考えている。

② 蘇軾は、この言葉を向上心に欠ける者が自分より劣る者を友とし、優れた者を避けるのを戒めるものと考えている。王夫之は、自分と同じ性質を持つ者は、自分と同類であることに意味があるので、「友とする」上ではその性質の優劣は重要ではないと考えている。

③ 蘇軾は、この言葉を思慮の浅い者が今の自分に満足して墮落していくのを戒めるものと考えている。王夫之は、自分と異なる性質を持つ者は、自分の性質に不足する面を補えるので、「友とする」上では一面的な優劣ではなく性質の違いを重視すべきと考えている。

④ 蘇軾は、この言葉を他者を顧みない者がつねに自分の損得のみを考えて行動するのを戒めるものと考えている。王夫之は、ある性質が自分に勝る者でも、自分が勝る部分が他にあるので、「友とする」上では単一の基準によって優劣を判断すべきでないと考えている。